

茂吉の挽歌群における「うつせみの」

—— 機能を主とした考察 (一) ——

山 根 巴

一 はじめに

茂吉の「うつせみの」の、機能を主とした考察(一) 〔茂吉研究〕

六輯

9月刊)では、その、自然詠における「うつせみの」(四四例)を

対象とした。つづいて、人事詠における七二例の「うつせみの」の考察には入っていきたいと思う。

「うつせみの」を含んでいる人事詠、七二首(二二首一例)の素材で、もっとも大きな位置を占めているのは死である。死を素材にしたもの一挽歌が、このうちに一四首ある。

死は、人間にとっては儼然きわまりない事実であり、また不可避な現象であるだけに、万葉においても、歌の素材としては重大に取り扱われているが、その扱わざまは、近代の茂吉にしても同様であり、「赤光」から「つきかけ」にいたる歌、一四、二二九首のうち、管見には入った挽歌は、さきの一四首をもあわせて、(注一)九四〇首ある。

九四〇首のうちの一四首は、約六七首に一首の割合であるから、そう多い数とは言えない。しかし、死を素材としたものにまとも

一四首も、「うつせみの」がみえるということは、茂吉の「うつせみの」では重要な問題である。ちなみに、「うつせみの」を含む人事詠七二首の素材で、死の次に多いのは、老い(自己)である。これは一〇首を数える。そのほかには、病苦(自他の)、生活苦、師友、兄弟の愛(広い意味での相聞的要素)などが目につくが、一四首・一〇首までにはまともでない。

万葉の「うつせみの」三一例は、すべて人事詠にみえるが、いまその素材をみると、相聞歌が圧倒的で一七例(恋愛のほか、親子・兄弟・夫婦の愛の歌をも含む)、次が挽歌で六例となっている。その過半数が相聞歌に用いられているというこの顕著な事実とは、万葉の「うつせみの」の性格、機能を考える一つのポイントにならう。茂吉の相聞歌にこれが少ない(恋愛歌がなく、広い意味での相聞的要素を含む歌で、管見には入ったもの三首)ことと対比して、万葉びとが相聞歌にこれを多く用いた理由につき、考える機会を別にしつつもである。

このたびは、茂吉の七二首のうちでもっとも多い挽歌群に着目す

る。すなわち、その人事歌で、死を素材にしたものにまわって一四首も「うつせみの」がみえる事実を注視し、彼が挽歌にこれだけ「うつせみの」を用いた意図を、万葉の挽歌群における「うつせみ」とのかかわりにおいて考察してみようと思う。

二 茂吉挽歌の基本的特色

△第一表 茂吉挽歌群の題目別・形式別一覽表▽

歌集名	制作 年次	大 題 目	小 題 目 (付前書)	歌 数		形式	被挽歌者名	備 考
				同時 作の つ	はな かめ 内容 をも			
1	明43 (7)	・悼堀内卓		7	7	a	堀内卓	第三首目の、第一句に、「うつせみの」がある。当歌は終から二首目。第三句に、「現し身の」がある。第一四首目の、第一句に、「現し身の」がある。
赤	44 (23)	・此の日頃		8	1	d	狂者	第一四首目の、第一句に、「現し身の」がある。第一四首目の、第一句に、「現し身の」がある。
光	大2 (71)	・おくに ・死に給ふ母		17	17	a	おくに	第一四首目の、第一句に、「現し身の」がある。第一四首目の、第一句に、「現し身の」がある。
2	4	・冬の山	「祖母」其の一	20	20	々	祖母 (ひで)	其の一、其の二は一月、其の三は二月作。其の一、第一四首目の、第四句に、「現し身の」がある。
あ	53	こがらし	二	17	17	々	祖母 (ひで)	其の一、第一四首目の、第四句に、「現し身の」がある。
またら	道	道の霜	三	11	11	々	祖母 (ひで)	第一句に、「うつせみの」がある。
6	14 (5)	・長塚節忌	三月七日於清水谷公園 皆春園	1	1	b	長塚節	第一句に、「うつせみの」がある。
ひ	昭6 (47)	・篠原上人挽歌	昭和六年八月十日 篠原上人近江蓮華寺に	10	10	a	篠原上人	第七首の、第三句に、「うつせみの」がある。

茂吉が、その挽歌に、枕詞「うつせみの」を含ませた一四首の場合、彼にとって、これを含ませなかった九二六首の場合にくらべて、何か特殊な場合だったのだからか。ここで、九四〇首の挽歌の、それぞれの制作事情を明らかにする必要がある。次の第一表と第二表、前者は、九四〇首を、その題目・形式別に、後者は、年代・対人別に整理したものである。

17		16		12			11		9
げかきつ		白き山		雲 寒			紅 曉		泉 石
		23		13			11		
		(21)		(46)			(30)		
		(16)		(32)			(18)		
挽歌控	安藤達三郎君	挽歌	安藤達三郎君	挽歌	岡田和一郎先生 入沢達吉先生 神保孝太郎君 松田やを	・貫徹	雑歌控	雑歌控	・挽歌
歳晚	中村憲吉 柿本人麿	強羅	伊藤左千夫	孫	松田	・伊藤信愛君を悼む	・吊橋健行君	雑歌控	昭和六年二月一日、 長兄広吉歿。(略) ・鶴外先生を憶ふ。 (略)
露源の代	幸田露伴	露伴先生一周忌	幸田露伴	萩源の代	岡田			雑歌控	
孫	菜地寛	孫	菜地寛	孫	入沢			雑歌控	
挽歌	安藤達三郎	挽歌	安藤達三郎	挽歌	松田			雑歌控	
1	1	1	1	1	1	3	1	4	7
1	3	1	1	10	1	3	1	4	7
b	c	d	a	d	d	d	b	◇	◇
安藤達三郎	中村憲吉 柿本人麿	伊藤左千夫	幸田露伴	菜地寛	松田	英 壺	橋健行	森 豊外	長兄 (広吉)
	↓始から一五首目	当歌は最終。	当歌は最終。	当歌は始から四首目。	当歌は最終。 第一句に、「うつせみの」がある。	当歌は終から二首目。第三句に、「現身の」がある。	第一首目の、「うつせみの」がある。	第一首目の、「うつせみの」がある。	第三首目の、「うつせみの」がある。

注1 題目の配列順序は、全集に出てくる順序である。

2 形式は、連作によるか単作によるかを視点として、a、b、

c、d、の四つに分類した。

a…一つの大題目あるいは小題目のもとに、その一連を構成

する二首以上の歌が、すべて挽歌的内容をもつもの。

b…一つの大題目あるいは小題目のもとにある一首の歌が、

挽歌的内容をもつもの。

c…一つの大題目あるいは小題目のもとに、その一連を構成

する。三首以上の歌のうち、二首以上が挽歌的内容をもつもの。これにはさらに次の四種がある。

- ① 二首以上が連続して、被挽歌者が同一であるもの。
- ② 別であるもの。
- ③ 二首以上が連続していなくて、被挽歌者が同一であるもの。
- ④ 別であるもの。

そこで、①には○、②には・、③には△、④には×を、それぞれ上につけて区別した。

d…一つの大題目あるいは小題目のもとに、その一連を構成する三首以上の歌のうち、挽歌的内容をもつものが一首あるもの。

3 制作年次欄の()内の数字は、その年の挽歌の総数である。
 4 大・小題目の上の・はその一連中に「うつせみの」を含む歌

△第二表 茂吉挽歌群の年代別・対人別一覽表V

被挽歌者	年次	
	1 堀内卓	2 狂者
43 (明)	⑦	
44 元 (大)	③	
45 2	①⑦	
3		
4		
5	2	
6		
7		
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14 元 (昭)		
2	1	
3		
4		
5		
6		
7		
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		
16		
17		
18		
19		
20		
21		
22		
23		
24		
25		
26		
27		
計	7	51
71④	17	17

があることを示す。
 △付記V

右の手つづきを経て、九四〇首のすべてにわたり整理しているがここには、「うつせみのを用いている歌のみえる、題目・形式と、他には、a、b、c (①) (④)までのいずれでもよい) d、の四形式のいずれもみえている年次のうちから、任意の一年をとり出して示すにとどめた。ちなみに、

① 小題目や前書に示されている制作年月(日)のおなじものは同時作とし、そのことなるものおよび、大題目はおなじでも小題目がいくつかにわかれているものは、それぞれ別々に作られたものとみて、いま、挽新制作の延回数数を数えると、三二二回になる。

② 三二二回を形式別にする、a 一六一六回、b 一八七回 c 三五四回 (○ 19・11、△ 16、× 19)、b 七四回で、a が圧倒的に多い。

計	114 森山汀川	83 松田やお	74 伊藤信愛	70 橋建行	50 英 壺	45 長 兄 (広吉)	44 篠心上人	19 森 騷外	9 長 塚 節	8 祖 母 (ひで)
7										
23										
45										
71										
/										
53										48
12									5	
17									16	
4										
/										
6										
9										
35								3		
9										
24										
5									(1)	
35									2	
14									1	
17									1	
5									37(2)	
44									1	
47						(10)	(10)		2	
17					3					
48							6	7	1	
61										
50						1		(4)		
18				(1)				1		
32			(3)		3				2	
46		(2)			(13)				1	
43					5				3	
49		35(3)			9					
28				2					1	
27								1		
5										
3		1								
2	(6)									
16										
6										
21										
6										
1										
2										
/										
940	6	16(3)	3	3	33	11	16	16	39(2)	48

注1 被挽歌者は、彼の歌にあらわれてくる順に配列して番号をつけた。

2 年次の上の・は、その年に挽歌のないことを示す。「赤光」には明治三八年以降の歌が入っているが、三八〜四二年までは挽歌はない。なお、「赤光」は初版による。

3 各欄の数値は、歌数を示す(単位は首)。

①数値を○でかこんだのは、その中の一首に「うつけみ」が用いられていることを示す。

②数値を()に入れたのは、被挽歌者が一人でないことを示す。

す。

たとえば、6 (1) は(昭和七年、実父——伝右エ門の場合)、その一首が、生母(いく)の挽歌でもあることを示す。また、7 (3) は(昭和一六年、子相の場合)、三首のうちの一首が左千夫の挽歌でもあることを示す。

4 年次別合計は、被挽歌者が二人のも、すべて一人として算出した。つまり、被挽歌者数とはかかわりなく、歌数を正確に数えることを意図した。

5 被挽歌者別合計の数値で、被挽歌者が一人でないのは、その

数を○でかこんで小さく示した。たとえば、
いくの場合)は、挽歌数七一首のうち、四首は他の被挽歌者
と共通であるという意。

△付記V

右の手つづきを経て、九四〇首のすべてにわたり整理している
が、ここには、「うつせみの」を用いている歌のみえている被挽
歌者の場合だけを示すにとどめた。ちなみに、

①被挽歌者の数は、個人だけで一二二名にのぼっている。

②一二二名のうち、もつとも多いのは、生母いくの七一首、ついで、赤彦(六五首)左千夫(六一首)、祖母ひで(四八首)、

節(三九首)、子規・養父——紀一(いずれも三四首)、人

麿・憲吉(いずれも三三首)の順。個人以外では、狂者の五一
首が多い。

第一表では、彼の挽歌に、連作によるものと単作によるものがあること、また、運作・単作のいずれであっても、はじめから「挽歌」「追悼」などと明示しているものとそうでないものがあること、すなわち、a, b, c, d, の四つの形式のあることが重要である(注参照)。どこまでが同時の作か、なお問題のあるものもなくてはなないが、いま、付記の①に記したような立場で、茂吉における挽歌の制作回数を数えると、そこにも示したように、延べ三一二回になる。これを形式別にみると、付記の②に記したように、aが一一六回でもっとも多く、以下、b, d, cの順になっている。

第二表では、次の三つのことを注意しておきたい。すなわち、その一は、被挽歌者が、実父母、養父母をはじめ、兄弟から師友その

他と、きわめて広範囲にわたって、付記の①に記したように、個人だけで一二二名にものぼっていること、その二は、その一二二名のうちでは、付記の②に記したように、生母の挽歌がもっとも多く、次が(注2)友の赤彦、師の左千夫であること、その三は、分布の年代は、明治末期から大正初期、昭年前半にやや集中してはいるが、明治四三年から昭和二六年までという相当のひろがりをもっていることである。

以上、茂吉の挽歌群が呈する現象の、ごく顕著な点に注目したが、これを呈するのに、「うつせみの」を含む一四首の挽歌がそれぞれにあずかっていることは、いままさらいうまでもない。

第一表によると、「うつせみの」を含む一四首の挽歌は、各々制作の時を異にしているが、まったく単独に作り出されているのは二首だけで、あとは、他の挽歌と、あるいは挽歌的な内容をもたない歌とともに作り出されている(ト―二回、a―一〇回、d―二回)。cに属するものがないことは、ここで一つの要点である。が、cは、さきにも述べたように、三一二回のうち三五回しかないのだから、その総数に比例しているとみれば、別に奇異ではない、aの多いことも、同様に考えてうなずけるが、ここで、「うつせみの」に即して、その過半数が連作による挽歌に含まれているという事実は見のがせず、また、その一連における「うつせみ」(を含む歌)の位置も、問題になるところである。

次に、第二表によると、被挽歌者は、個人が一二名で、あと、狂者と英霊とがそれぞれ一首ずつである。生母について歌数の多い赤彦・左千夫の挽歌に、「うつせみの」を用いたのがないということとは、これの使用と、被挽歌者の生前における彼とのかかわりあいの

親疎といったようなことが別に関係ないことを示している。二人の顔ぶれは、肉身・友人からさらには私淑する人たちと、かなり範囲が広い。分布の年代も、明治四三年から昭和二年までのひろがりの中で、明治末―大正初期、昭和前半にやや集中という、一般挽歌群の傾向に準じている。

形式・対人・年代などの点で、「うつせみの」を用いた一四首の場合に、これを用いていない九二六首の場合といちじるしい相異があれば、挽歌に「うつせみの」を用いた意図の、ある面をうかがいうるのであるが、以上みてきたとおりで、別に異なるところはなく、したがって、意図のすべてがもつと奥にあると考えられる。そこで、次の段階として、対素材の姿勢——死の扱い方——に着目しなければならぬ。

三 発想契機による茂吉挽歌の基本的性格

ⅧⅠⅤ 連作によるものの場合

- 1 はるばると薬をもちて来しわれを目守りたまへりわれは子なれば
- 2 寄り添へる吾を目守りて言ひたまふ何かいひたまふわれは子なれば
- 3 桑の香の青くただよふ朝明けに堪へがたければ母呼びにけり
- 4 死に近き母が額を撫りつつ涙ながれて居たりけるかな
- 5 我が母よ死に給ひゆく我が母よ我を生まし乳足らひし母よ
- 6 いのちある人あつまりて我が母のいのち死行くを見たり死ゆくを
- 7 ひとり来て蚕のへやに立ちたれば我が寂しきは極まりにけり

これらは、「死に給ふ母」(大2「赤光」)(注3)の其二、一四首のなかのものである。

茂吉は、この7の歌について、「作歌四十年」のなかで、「母もとうとう亡くなったことをおもふと、その寂寥は殆ど無限のやうな気がする。」(注4)と述べている。徹爾きわまりないとは言え、死ほど悲しく寂しいものはないが、それが、もつとも血のつながりの濃い生母の死であるから彼の悲しみもまたその極限に達する。3、4などは、極限に達したその悲しみをそのまま形象化したものとみてよからう。死を、母のいのちを、悲歎するところ一すじで、一首は発想されている。

ところで、視点を1、2の歌に移して、その第五句を見よう。ともに、「われは子なれば」とある。一首の感動の集中心ともいうべき結句に、特に、2のごときは、一―四句まで、死に近づく母の表情をじつに生き生きとうたいあげているが、その結句に、なぜ「われは子なれば」とおかなければならなかつたろうか。茂吉に即してみると、この叫びは、臨終迫る母のかたわらにいて、その深い悲しみに堪えねばならない自己を自覚するところから発せられている。つまりこの結句は、死を悲しまねばならぬ——そしてその悲しみに堪えてなお生きつづけねばならぬ生者、われのいのちをいとおしむ心ゆえの叫びなのである。

死という事実と直面することによって、より切実になる生者のいのちの自覚であるが、それが、1、2の歌の第五句のように、そのまま一首の上に表わされてくると、すなわち、死者への感情を、生者の位置や心身の状態などとの対比でのべる手法がとられてくると、その一首を発想させた直接の契機は、死者への悲歎というよりむしろ

ろ、生者への愛惜という方が適切になる。茂吉挽歌の発想契機に、
④死者（被挽歌者）への悲歎、⑤生者（挽歌者）への愛惜、の二つ
があると考へたい。6の歌も、その発想契機は④である。「いのち
ある人」が、「母のいのち死行くを見」（注5）ると、一首に「いの
ち」を重ねて用いたことが、いのちあって、母のいのちの死を悲し
み、その悲しみに堪えてなお生きつづけねばならない者の、生への
悲哀・愛惜を、いっそう深いものにする効果をあげていると言えよ
う。1・2では結句におかれて生が、この歌では1・2句にある。

ともあれ、死を生とのかかわりにおいて扱っている——死者への感
情を、生者の位置・心身の状態との対比でのべている——点にかわ
りはない。

以上を要するに、死の悲しみは、茂吉の場合、生への自覚・愛惜
に通じるのである。が、さらに、その切実な悲しみは、究極におい
て、生の讚美にも通じている。5の歌の四・五句は、ありし日の母
の生命力を限りなく讚美したものである。

五九首もの大連作と、二首ばかりの小連作とを、同じく「連作」
という一つの枠に入れることには考慮の余地がある（注6）。また、一
連の題目は挽歌の内容とまったくかけはなれており、事実、そのも
とにある歌もほとんど挽歌的内容をもっていない中に、一首もしく
は二首、挽歌的内容をもつものがよみこまれていて（多くは追慕の
場面になっている）、しかもそれが、一連のその場所によく落着い
ているのがある（一首のをd二首以上のをcとした——前節第
一表参照）。挽歌だけについていえば、dの形式は単作である
が、はじめから単作で作られているbの形式とは事情を異にするか
ら、同次元には置けない。——といったように、連作による場合の

問題はかなり複雑であるが、いまは、さきみてきた1—7の七首
に即して、死に近き母を看病し、その死を目守る間の心動きに、次
のような、すなわち、自己の生命を自覚する→悲しみをかさえき
ずにそのまま吐露する→生前の母の生命力を讚美する→居合わす生
者の生への愛惜を深める→「いのち死行く」を現実に見て、切迫し
た悲情がきわまりなく溢れ出る、というような起伏があることを注
意しておく。

△2V単作によるものの場合

8 身まかりし君の年よりも十年あまり吾の齡は多くなりたり（昭
3「ともしび」↓長塚節）

9 わがよはひ百穂阿伯のみまかりしよはひを過ぎておほく風寝す
（昭13「寒雲」↓平福百穂）

10 ながらへて君をおもへば衰ふる齒のこといふもはやおほけなし
（昭17「霜」↓島木赤彦）

（注）↓の下に記したのが被挽歌者である（以下の例歌の場合も
同じ）。

これらは、いずれも形式上、つまり単作による、（注7）忌日歌会
のものである。年月を経て、激しい感情はしずまっているものの、反
面、茂吉の場合は、被挽歌者の生より自己の生がどれだけながらう
かということが、また、現にある年月をながらえているということ
が、年を重ねるにしたがって重要な問題になってきている。

節を、百穂を、赤彦を追慕しながら、結局は自分の生の現実の詠
歎になっているのを注意しなければならない。被挽歌者への感情が
自己の心身の状態との対比で遠べられている。発想の契機は、した
がって、死者への悲歎でなく、生者への愛惜とみるべきであろう。

- 11 苦しさに叫びあげけむ故人の古りたる写真けふ見つるかも (大
5 「あらたま」↓正岡子規)
- 12 逝きましてはや九年になるといふ御寺の池に蓮咲かむとす (大
10 「つゆじも」↓伊藤左千夫)
- 13 きさらぎに降りたる斑雪すてによこれ消のこる見れば君し傳ば
ゆ (昭2 「ともしび」↓長塚節)
- これらも、11の形式による、追悼歌会の作である。年令を焦点に
していないのは、制作年代が比較的早いためであろうか。発想はと
もに、死者への悲歎を契機としているようである。
- 14 同船にて来りし君がベルリンに死にたりといふ動悸しやまず
(大12 「遠遊」↓赤松信麿)
- 15 いくとせかわれより後にうまれつつ君も亡きひとの数に入りた
り (昭5 「たかはら」↓杉原皓三)
- 16 夜にして山の上よりこがらしの過ぎぬるがごと過ぎてかへらず
(昭14 「寒雲」↓中村孝)
- 17 狩野亨吉先生ゆきたまふ夜もすがらからくれなるの血潮を吐き
て (昭17 「霜」↓狩野亨吉)
- これら14の形式によるが、何回忌・追悼とないので、逝去の
場面のもと考えられる。被挽歌者が年下であると、この場面でも、
15 のように齡を焦点にする。年上の自分のいのちがなお続してい
ることに感極まっているのである。14 の結句「動悸しやまず」は、
友人の死をきいた時の彼の心身の状態である。被挽歌者の齡に関し
てはいま知るよしもないが、死を、生とのかかわりにおいて扱って
いる点、15 と共通である。制作の事情がそれぞれ異なるから、さ
きの1、2、6、と3、4、7、のようには言えないが、14、5、

にくらべると、16、17、は死をそれとして扱っているといえる。
11、12、13、や3、4、7と手法の上で共通、いわゆる挽歌の体で
ある。

もし、14、17をそれぞれ冒頭において、以下何首かずつが読み
添えられたならば、各連はどういうすがたのものになろうか。こ
れは、8、13についても一応考えられることだが、一首々々につ
いてみれば、それぞれに被挽歌者の把握がゆきとどき、14、17
に限ってみても、切迫した悲情が、けつして上すべりにならずにの
べられていく。凝縮しつくされているというか、単純化されきって
いるというか、いずれにしても、感情の整理の十分であることが認
められるのである。

以上、発想契機による茂吉挽歌の基本的性格を、連作による場合
と単作による場合とにわけてみてきた。いずれにも、素材としての
死をそれとして扱ったものと、それを生とのかかわりにおいて扱っ
たものがあるから、すなわち、発想契機が、死者への悲歎である
場合と生者への愛惜である場合とがあるから、死に直面して抱いた
心情が、一方は起伏をともなつて続くのに対して、他方は続かない
ことだけが異なっているということになろう。この事情は、「うつつ
せみの」を一首に含む挽歌群、一四首の場合も同様である。

四 茂吉の挽歌にみえる「うつつせみの」

①うつつせみの君とまじく語らひし一夜かぎりて永久にあひ見ず

(昭12 「寒雲」↓伊藤信愛) ②

②うつつせみの人の国をば君去りて何辺にゆかむちははをおきて

(明43「赤光」↓堀内草) ㉑

③ 法類は泣きなげけどもうつせみの怠たえたまひいさこのごとし

(昭6「石泉」↓隆広上人) ㉒

④ うつせみのいのち絶えたるわが兄は黒溝台に生きのこりけり (昭

6「石泉」↓長兄) ㉓

⑤ 国のため直に捨てたる現身の命の霊を空しからしむな (昭13「寒

雲」↓英霊) ㉔

⑥ うつせみのこの世の限りあな寂し森山汀川もみまかりゆきて (昭

21「白き山」↓森山汀川) d

⑦ うつせみの身まかるとくしづかなる仏になりぬ吾が傍に (昭13

「寒雲」↓松田やを) ㉕

⑧ うつせみの我より先に身まかりてはや十年になりけるかも (大14

「ともしび」↓長塚節) ㉖

⑨ うつせみのわが身も老いてまぼろしに立ちくる君と手携はらむ

(昭11「暁紅」↓橋健行) ㉗

⑩ うつせみの吾も老ゆれば日をつぎて森鷗外先生をしきりに思ふ

(昭10「暁紅」↓森鷗外) ㉘

⑪ 現身うつしみのわれなるかなと歎かひて火鉢をちかく身に寄せにけり

(明44「赤光」↓おくに) ㉙

⑫ 終列車のほりをはりて薙り火をまもる現身うつしみのしはぶきのおと (大

4「あらたま」↓祖母) ㉚

⑬ 火を守りてさ夜ふけぬれば弟は現身うつしみのうた歌ふかなしく (大2

「赤光」↓生母) ㉛

かなしく歌ふ (改)

⑭ 生くるもの我のみならず現し身の死にゆくを聞きつつ飯食しにけり (明44「赤光」↓狂者) d

(注) 1、下の○の中には、それがよっている形式を示した。(以下

下の例歌の場合も同じ)

2、作品の傍線は筆者がつけた。(同前)

さきにわたくしは、死者への感情を生者の位置・心身の状態などとの対比でのべる手法がとられてくると、その一首を発想させた直接の契機は、死者への悲歎というよりむしろ生者への愛情というほうが適切になる、といった。ここの⑩は、一・二句に生者の位置が示されている。が、それと、三句以下の死とが「ども」でかかわらせてあって、しかも、そのひびきがかなり強い。一首は、たとえば⑭などと同じように生者への愛惜を契機として発想されているとはどうも言いがたい。これは、①②と同じく、死者への悲歎を発想の契機にしていると考えたく思う。④⑤の契機も、①③に準ずる。しかし、それでいて、④は、さきの⑤の四・五句の語句がかもしたと同じような、(注8、生の力を讚美する雰圍気をもっているようであるし、⑤は、死者をいのちをただ悲しむのでなく、(注9)それを慰め、ひいてはそれに感謝する気持がみえている。⑥は四・五句が死で、一・三句が生者茂吉の心の状態、⑦は一・四句が死で、結句は生者の位置である。しずかな仏になったのが自分の傍にであるというところ、生きている自己への認識をここであらたにしたとみることはできないだろうか。⑧は、さきの⑧と同想である。節の死は大正四年であるから、この年であろう一〇年になるが、そのことをいうのに、自分を軸にして、自分より先に死んで一〇年が過ぎた

としている。死を生とのかかわりで扱っていること、しかも、その生が「われ」のそれであること、ともに次の⑨⑩と共通している。

⑨も、生は「われ」のであるが、これには、基本素材である死がない。のち程、またそのことに触れる。⑨⑩は、挽歌とはいえ、広い意味での相聞的要素も加わっている。すなわち、三句以下の、「まほろしに立ちくる君と手携はらむ」と、「日をつぎて森鷗外先生をしきりに思ふ」とは、会おうとする思慕の情の表現である。といって、それは現世の会いではない。だから挽歌になるのである。

この思慕の情は、彼が老いたことによって生じた。「わが身も老いて」「吾も老ゆれば」は、「手携はらむ」「しきりに思ふ」に、それぞれ直接にかかっている。このことは、老いなければこの思慕の情は生じないことを示すと同時に、さらに次のようなこと、すなわち、彼は、(注10)「老い」を「現なることわり」として、歌の重要な素材の一つにしているが、その「老い」が自己のそれであって、それをそのまま「われも老ゆれば」とした場合、この発想には、挽歌的抒情へ端的に引き入れていく力があるのではないかということを考えてみる。ちなみに、

18 やうやくに老のしづけさにあけられて亡き数に入りし友をしぞおもふ(昭8「白桃」↓島木赤彦) d

19 やうやくに老いづくわれや八月の蒸しくる都屋に生きのこり居り(昭2「とししび」↓芥川竜之介) ⑥

など数首があり、こう考えるのはまず可能と思う。これらと⑨⑩とを、また、⑤と8 とをくらべると、「うつけみの」の効用がはっきりするが、それは⑩まで一通りみた後にする。⑩は、さきに触れたように、生だけで死がない。しかもその生は、「われ」の心身の

状態の描写である。この、挽歌らしくない挽歌の理解には、これが

a の形式によっていること、すなわち、一連一七首のうちの四首目で、冒頭に(注11)「なにか言ひたかりつらむその言も言へなくなりて汝は死にしか」があり、途中には「うつけし世のかなしき汝に死にゆかれ生きの命も今は力なし」のような歌もあることの理解が前提になる。連作にしたために、挽歌の心情が起伏しながら拡大されていっていることを考慮しなければならぬのである。第三句「歎かひて」の内容は、「われなるかな」である。おくにの死に直面して深い悲しみに沈んでいるが、なおそれに堪えて生きねばならぬわれなるかな——で、その(注12)「われ」が、⑨⑩の「われ」とおなじように、「うつけみの」をともなっている。その結果、彼の「現身」意識がいつそう鮮明に表われているが、このことは後にもう一度のべる。一首の発想が、生者への愛惜を契機としていることはいうまでもない。

⑨⑩は火葬の場面である。けれども、⑩には「火」としかない。この点、この歌が、1-7に掲げた「死に給ふ母」々其の二々に続く々其の三々一四首のうちの九首目であることを心しておきたいと思う。心情が拡大されている⑩の歌に対して、これでは素材が、連作にしたために拡大されているわけである。そのように拡大しながらも、方法的には、彼は、その死を、「弟は現身の歌ふかなしく」という生とかかわらせている。それは、⑩の「葬り火」を、「現身のしはぶきのおと」とかかわらせたのおなじ手法である。母を、祖母を葬る火を目守らねばならぬ——その悲しみに堪えねばならぬ生者のいのちをいとおしむ心を直接の契機として、それぞれの歌は発想されたと考えられる。

ところで、この両者の「現身の」は、ともに第四句に布置している。第四句に布置させたからはっきりした意味内容をもつことになったのか、はっきりした意味内容をもたせるために第四句に布置させたのか、そこはもとよりわからないが、いま、これらもあわせて八例の四句布置の「うつせみの」をみると、(注13)その多くがそれぞれにはっきりした意味内容をもっている。この両者でも、もし各々から「うつせみの」を除くと、歌としての意味が通じなくなる。武田祐吉博士のいわゆる(注14)「枕詞の意味の転用」がなされているのである。たとえば⑧⑨⑩⑪などの「うつせみの」との用法上の相異を認めねばならない。⑩の「現し身」も、これは三句布置であるが、用法は⑧⑨のそれと同じである。一首は、「飯食しにけり」に詠歌の中心があり、その主体は、「我のみならず生くるもの」なべてであるから、発想の契機は、「現し身の死にゆくを聞く」立場に在る、「生くるもの」のいのちをいとおしむ心にあるとみることが出来る。

以上、「うつせみの」を一首に含む挽歌群一四首を、発想を中心に考察してきた。その間、⑩以降の「うつせみの」で枕詞の意味の転用に、⑧⑨⑩⑪の「うつせみの」でその「現身」意識の表われにごく少し触れただけであるから、以下、一四例の挽歌群の「うつせみの」について、総括的に、考えられるところを述べてみる。

まず、「うつせみの」は、一首の契機が①⑤のように死者への悲歎であるものにも、⑥⑭のように生者への愛惜であるものにも含まれている。さきの契機の場合は、おおむね「うつせみの」は死者の側に、あとの契機の場合は、おおむねそれが生者の側にある。さきの契機の場合、これがなくても、死者のいのちを悲しむところ

はしみじみとしている。が、たとえば①のように、死者である「君」の上に「うつせみの」がおかれると、その「君」が「うつせみ」であるという、すなわち、被挽歌者である君のいのちは、はかなく悲しいうつせみのそれであるという意識が表面化して、その死を悲しむところが、よりいっそうしみじみとしたものになってくる。同様に、あとの契機の場合は、これがなくても、たとえば8や18、19のように、生者のいのちをいとおしむ心は切実であるが、⑧⑨⑩⑪のように、生者である「われ」の上に「うつせみの」がおかれると、その「われ」が「うつせみ」であるという、すなわち、挽歌者である自分は現に生きてこの世にある身であるという彼の「現身」意識が鮮明になり、そのいのちを愛惜するところがよりいっそう切実なものになってくる。

以上を茂吉に即してみると、死者のいのちを悲しむところをよりいっそうしみじみとしたものに、また、生者のいのちをいとおしむところをよりいっそう切実なものにするために、「うつせみの」を①①⑩までのおいたのだといえる。と同時に、彼の「現身」意識を挽歌に適用した一々拡大使用したともみることが出来る。

(注15)「現身ははかなけれど現し身になるが嬉しく嬉しかりけり」(明42「赤光」)には、その「現身」の意識の内容が端的にあらわれている。が、これについてくわしくは、さらに多くの作品に注目しなければならぬ。

- 20 うつし身と生きのこりつつ春山のこの寂しさに堪へざらましを
(大15「ともしび」↓鳥木赤彦)⑩
- 21 白浪は磯こす浪と寄すれどもうつせみ君は立つこともなし(昭
17「霜」↓北原白秋)④

これらはいずれも挽歌の中のものである。これらを含めて(注16)一四例の「うつせみ」が挽歌にみえることは、おなじく「うつせみの」の一四例がこれにみえることともに、彼の「うつせみ」意識のあらわれるおもしろい場を示すものとして注意すべきである。

さきにも述べたように、㉔以降の「うつせみの」では、枕詞の意味が転用されている。とはいえ、これが第三句・四句にあるために、そこで一首の歌想が屈折し、調べが変化している。第一句にあるものは、この、歌想・歌調を屈折し変化させる動きのかわりに、全体の感情内容を統一する働きをもっている。ほかに、一首の音調を整え、その意味内容を単純化し、その構成の上にある安定感を与える働きは、どの場所に布設するものももっている。ちなみに、一般挽歌群にくらべれば、一四首、意味内容の単純化がきわだっていると感じられるのは、一四例の「うつせみの」の働きによるものである。

五 左千夫の挽歌にみえる「うつせみの」

(注17) 茂吉に先行するアララギ歌人では、左千夫の挽歌に「うつせみの」がみえる。

左千夫の「うつせみの」は、総用例数二九、そのうち五例が自然詠に、あとの二四例が人事詠にみえている。その素材で多いものは恋、これが三首ある。死を素材にしたもの——挽歌は、一首である。

①うつせみの世にいとはれし病得て若くて逝きし君を悲しむ(明88)

「悼野口寧齋」四首のうち) ㉔

「君を悲しむ」と結句にすえているのであきらかなように、一首

は、死者への悲歌を契機にして発想されている。初句から四句までは「君」の説明である。「世」から説きおこして、これだけの説明を「君」につけねばならなかったのは(注18)彼の考えが、「世」↓「人」↓「われ」であるためであらう。すなわち、彼の場合は、

「ゆく雲の雲間の星のまたたきを待たず消えゆく現身うつせみの世や」(明41)という宿世観が基盤になり、そのようなはかない世に住む人間の人生も、病を得て、若くて死ぬというふうには、まったくはかないものとする。そして、死に直面しては、内に、死者に対する深い哀傷の心をたたえて、悲しみを悲しみとして直叙していくのである。

②たらちねの親子三人とうたはれし君がみ言の今しかなしも(明88「無一庵歌帖——胡桃沢子の父君を悼む」) ㉔

③日のめぐりいくたび春は返るともいにしへ人に又も逢はめやも

(明40「勾玉日記——四月十九日子規先生忌日」) ㉔

④幼どち姉と手をひき横歩み舞ひそばえしが目に消えぬかも(明42「吾児がおくつき」) ㉔

⑤世に生くる命の力よわかりし汝が泣声を思へば悲しも(大元「招魂歌——菓子宛一郎の死を悼む」) ㉔

⑥山川の水のさやけき御心を今つくづくと恋ひたてまつる(大2「奉悼有栖川宮歌」) ㉔

約一〇〇首におよぶ左千夫の挽歌のなかから、任意にとり出した。形式の上よりみると、aがもっとも多く、次がりである。この点茂吉とかわらない。けれども、c、dによるものがなく、(注19)長歌(反歌をとまなう)によるものがあることは、茂吉と事情を異にする。

①⑥は、いずれも真情を吐露して、死の悲しみをうったえている。生への欲求があるから死を悲しむのであるが、たとえば、さきにみた茂吉の⑩の歌の「現身の死にゆくを聞きつつ飯食しにけり」(傍線)のように、生命そのものに対する力強い欲求を直接によんだものは、一〇〇首のうち一首もみることができない。要するに左千夫の挽歌には、被挽歌者のいのちを悲しまねばならぬ、そして、なおその悲しみに堪えて生きつづけねばならぬ生者への愛惜を発想の契機としたものは、ついにみる事ができない。素材の扱い方における茂吉との相異を認めなければならぬ。

①の第一句の「うつせみの」は、一首の音調を整え、意味内容を単純化し、構成の上に安定感を与えたとともに、全体の感情内容を統一している。それに加えては、これがあることによって、彼の、宿世観にもとづく人生への悲歎とでもいうべきものが、より深く表わされているように思われる。

六 万葉の挽歌にみえる「うつせみの」

万葉では、「うつせみの」の総用例三一がすべて人事詠にみえる。相聞歌に一七例。死を素材にした挽歌には六例(長歌三・短歌三)を数える。

①現身うつつせみの人なる言や明日よりは二上山を兄弟と吾が見む(巻二・一六五大来皇女)②

③うつせみの世の事なばれ外に見し山をや今は所縁と思はむ(巻三・四八二高橋朝臣)反歌

④うつせみの代は常なしと知るものを秋風寒み思ひつるかも(巻三・四五六伴家持)⑤

万葉に、長歌による挽歌の多いことは左千夫以上であるから、茂吉とくらべれば、第一にそのことが、第二には、c dによるものがないことが、形式の上での相異になる。

①の1・2句は、茂吉の解にしたがって「生きて現世に残ってゐる私は」ととり、弟が二上山に葬られたことよって、自分が現身であることを強く意識し、それをそのまま表明したものとみる。しかし、「明日よりは……」と下に続くと、一首の発想の契機が生者への愛惜であるとはどうも言えない。深く烈しい悲しみが悲しみとしてよみ出されているけれども、その悲しみに堪えて生きねばならない挽歌者(自己——生者)をいとしむころ——生命そのものに対する力強い欲求が直接にうたわれていないからである。この点に②③とも同じである。ただ、②③は、死に対する考え方が表面にみえている。すなわち、②は、妻の死をおくるのも、「うつせみの世の事なれば」と分別をたてている。③も、この世が無常であることを熟知の上で、作者は、秋風の寒さに亡き妻そばめをしのんでいる。

②③のように表立っては言わないが、死は不可避、不可抗力のもの、として畏怖する心持ちは①にもある。悲しみが深ければ深いだけ避けがたく、人間の力ではどうすることもできないのが死であることを、万葉びとは知ったのではあるまいか。

④秋山の黄葉を茂み迷ひぬる妹を求めむ山道知らずも(巻二・二〇八人麿妻)反歌

⑤深浪の志我津の子らが罷道の川瀬の道は見ればさぶしも(巻二・

二一八人麿↓志我津采女）反歌

⑥ 八雲さす出雲の子等が黒髪は吉野の川の奥になづさふ（巻三・四

三〇人麿↓出雲娘子）④

⑦ 世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり（巻

五・七九三旅人↓妻）⑤

⑧ 佐保山に棚引く霞見るごとく妹を思ひ出泣かぬ日は無し（巻三・

四七三家持↓妾）⑥

約三〇〇首の挽歌より任意にとり出した。人麿のものが、悲しみを悲しみとしてそのまま表現している——感情と表現との間にすぎがない——のにくらべて、後二者のは、いくらかすぎがあるように思える。挽歌における感情の表出法として問題になる点である。ともあれ、その抒情の契機は、どこまでも死者への悲歎であって、生者への愛惜にまでは及んでいない。このことは、集の挽歌すべてについてとも言えるようである。

①②③の「うつせみの」は、ともに第一句にあつて、それぞれの歌の感情内容を統一しながら、音調を整え、意味内容を単純化し、構成の上にも安定感を与えている。また、長歌では、歌想や歌調を屈折・変化している。これに加えては、これがあることによつて、万葉びとの、無常観にもとづく死への畏怖とでもいうべきものが、より深く表わされているように思われる。

七 結 語

死。人が人間にとって不可避なものであることは、万葉びとも左千夫も茂吉も考えている。したがつて、それに深い悲しみをよせるのも

また三者共通である。が、万葉びとは、悲しみのあまりにそれを畏怖した。一首の音調を整え、意味内容を単純化し、構成の上に安定感を与え、全体の感情内容を統一しながら、特にまた、長歌では、一首の歌想や歌調を屈折・変化させながら、六例の「うつせみの」は、それぞれに、作者の無常観にもとづく死への畏怖を、より強く表現する働きをもっているようである。

畏怖する気持ちは左千夫にもある。死は人の力ではどうすることもできぬと彼は考えた。そこでそのようなはかない人生を悲しむのである。挽歌にはただ一例だけであるが、その「うつせみの」は、一首の音調を整え、意味内容を単純化し、構成の上に安定感を与え、全体の感情内容を統一する働きとともに、彼の、宿世観にもとづく人生への悲歎をより深く表現する働きをもっていると思う。

茂吉も、死という厳粛な事実の前には、人間の力などとうてい及びがたいことを熟知していた。だから、彼とそれぞれにかかわりのあった人々の死に際しては、それを心から哀悼した。が、その悲しみの情は、そのまま、そのように悲しまねばならぬ生者への悲哀となつていった。死者への悲歎とともに、生者への愛惜が、彼の挽歌発想の契機となつているゆえんが考えられる。この二つの契機によつて発想されて、彼の挽歌は九四〇首にのぼる。このうち、「うつせみの」を用いているのは一四首である。一四例の「うつせみの」は、死者への悲歎を契機にしたものにも、生者への愛惜を契機にしたものにも用いられて、それぞれの場で、死者のいのちをはかなむところをよりしみじみとしたものに、生者のいのちをいとおしむところをより切実なものにする働きをしている。

以上、万葉↓左千夫↓茂吉の線で、それぞれの挽歌群にみえる

「うつせみの」の働きを要約したが、万葉と左千夫の場合、一首の発想契機がすべて共通しているから、そこに用いられている「うつせみの」も、死への畏怖の念が表面にあらわれる程度の強弱に注意すれば、同一の線で考えてよからうと思う。茂吉の場合も、死者への悲歎を契機としたものにある「うつせみの」については、万葉や左千夫の挽歌の「うつせみの」の働かせ方を学んだといえるけれども、もう一方に、生者への愛惜を契機としたものがあり、その方に前者よりむしろ多くの「うつせみの」を用いているので、全体としてわたくしは、彼は、この「うつせみの」に、万葉や左千夫のそれとおなじく、一首の音調を整え、意味内容を単純化し、構成の上にも安定感を与えて、全体の感情内容を統一する、また、三四句にあるものは、歌想や歌調を屈折・変化する——などの働きをさせながら、しかも、彼自身の生へのはげしい執着・自覚から、これを、死の悲しみに堪えてなお生きねばならぬ挽歌者の側において、そのいのちを愛惜するところをより切実に表現する働きをもたせることにより、すなわち、彼の「現身」の意識を挽歌に適用することににより、これを、近代に生きる彼の、挽歌群の枕詞にしたと考えたいのである。

△注V

1 自殺を含める。そして、万葉の場合とおなじく、死殯の際のもともより、逝去・臨終・追悼(慕)に関するものなど、死とかかわるさまざまな場面のものを含む。

2 節・子規・憲吉のもかかなりの数にのぼっていることとあわせて、アララギという結社の一つの性格がうかがえるように思う。

3 本篇は五九首より成る。「其の一」は一首で母危篤の報に帰省する車中の作、それにつづいて死に近き母を看病し、その死を目守るところをよんだ「其の二」があり、以下、「其の三」の一四首は葬送曲、「其の四」の二〇首は追憶篇という内容で、茂吉の挽歌群ではもとより、短歌史の諸挽歌群においても、圧倒的にうべきものである。第一表の形式分類では、いうまでもなく、aに属する。すなわち、連作による挽歌の典型的なものである。五九首を、「其の二」だけならば一四首を、通してみるのをたてまえとするが、当面的問題の性格として、まず半教に触れば見当がつくようなので、七首をとることにした。始めと終りの二首ずつと、他は中間から三首をごく任意に摘出した。特に「其の二」を選んだのは、この篇が全体の中心をなすからである。

4 斎藤茂吉全集二〇巻二八ページ。

5 「いのち死」す、といういい方は茂吉流である。ちなみに、「赤光」から任意にとり出しても「自らのいのち死なんと直いそぐ狂人を守りて寝ねざるものを」(大元「葬り火」)「鰥の子も居たりけりみづからの命死なんとせずこの鰥の子は」(同前「冬来」)などがある(傍線筆者)。

6 少ない歌数で心情を処理しえた場合と、そうでない場合という見方も成り立とうが、なお考えなければならぬ。

7 節は、大正四年二月八日、三七才で逝去(8の歌を作った昭和三年、茂吉は四七才)。百穂は、昭和八年一〇月三〇日、五七才で逝去。(9の歌を作った昭和一三年、茂吉は五七才)。赤彦は、大正一五年二月二七日、五一才で逝去(10の歌を作った昭和一七年、茂吉は六一才)。

ちなみに、赤彦、左千夫の忌日歌の歌に、aによるものも少なからずあるから、決して一概には言えないが、aによるものだけに

ついでみると、これらの歌会や、その他、いわゆる追悼(慕)の場面でよんだと思えるものが全体のなかに及んでいるので、死葬・逝去・臨終などの場面は、傾向として、a によることが多く、追悼の場面はb によることが多いということができるとかと思ふ。

8 第八歌集「連山」の、「黒禰台」一連一九首のなかに、「わが兄の戦ひたりしあとどこぞ蘇麻堡を過ぎてころたかぶる」(昭5)があり、第一歌集「曉紅」の、「踰類の歌」一連九首のなかに、「三年まへに身まかりゆけるわが兄は黒禰台戦に生き残りけり」(昭10)がある。後者は挽歌である。前者の背景は、同時に記された随筆「満洲雜記」(全集一巻)や、後年、竜馬山房夜話に語られた「黒禰台戦」(全集二巻)「第八師団戦記」(同前)などの文章によって知ることができる。黒禰台戦はロシア軍の意外な大攻勢を、苦戦してしりぞけた戦である。その苦戦した兵士の一人に、茂吉の長兄広吉がいた。そして彼は生き残った。「曉紅」所収の歌にせよ、この④にせよ、弟として長兄の死を悲しむあまりに、かつて、あの激しかった黒禰台の戦には生き残ったのだ——と、その悲しみが、ありし日の兄の生の力を讃美する方向に形象化したのであろう。

9 年頭の詠である。前年七月七日に日支事変が勃発している中で、年頭、大いに士気を鼓舞したものである。

10 第一七歌集「つきかげ」のなかに、「老いといふこの現なることわりに朝な夕なは万事もの憂く」(昭23)「老ゆといふことわりをわれ背に負ひ心あへぎし記憶たどらむ」(同前)などがある

(傍線筆者)。

11 これは、死をそれだけで扱っている。すなわち、死者への悲歌を発想の契機としている。次の途中にははじめから五首目。これは、死を生とかかわらせて扱ひ、生者への愛惜を発想の契機としている。

12 「うつせみのわれ」の接続形式の類用は、茂吉における「うつせみの」使用の特殊性の一つである(「茂吉における「うつせみの」考——万葉の「うつせみの」との関連において——」『文学・語学』第20号所収)。総数一一六例のうち、四二例がこれに近づいている。四二例のうち、二八例が自然詠にみえる。人事詠には一四例、そのうちの四例が挽歌にある。このことは、挽歌における「うつせみの」は重要なことである。

13 たとえば、「罪をもつ人もひそみて居りしとふうつしみのことはなべてかなしき」(昭6「石泉」)「蠟燭を消せば心は氷のごとく現身みづかみのする計らひをせず」(昭22「白き山」)など(傍線筆者)。

14 「枕詞の意味を転用して、その修飾する詞句の代りに使ふものがある。例へば、あしひきのは山の枕詞であるが、後には、あしひきのを以て山の意味に使ふやうにもなり、あしひきの嵐吹く夜はなどの用語を見るようになった」。(「言葉の樹」所収——枕詞。傍線筆者)

15 この歌、改版では、二句以下が「悲しけれどあはれあはれ命いきなむとつひにおもへり」となっている。茂吉の、「現身」についての考えかたは、その作品にもっともよくあらわれている。

る。『文学・語学』第20号所収の拙稿に（注12、参照）、この歌を除く、ほか三首の例歌をあげて、すこし触れたところがある。

16 枕詞以外の「うつけみ」の総数は九四例である。（『文学・語学』第20号所収の拙稿参照）この、20は生者への愛惜を、

21は死者への悲歎を、それぞれ発想の契機としている。20の「生きのこりつつ」いる者はいうまでもなく茂吉、この「うつし身」は、それ「なるが嬉し」きもの——の意を、21の「うつせみ」は、それは「はかなき」もの——の意をもっている。

17 主要歌人として、子規・左千夫・節の三者を対象とする。

18 これについては、さきの拙稿「茂吉における「うつけみの」考——万葉の「うつけみの」との関連において——」を参照していただきたい。

19 挽歌だけでなく、左千夫には長歌が少なからずある。長歌は、子規・節もまた作っている。万葉に親しむことよって得たその表現技法であるが、おなじくその系譜に立って万葉に親しみながらも、茂吉は、一首の長歌も残していない。アララギにおける万葉継承の問題で注意すべき点の一つがここにもある。⑥はりよるが、題字の下に小さく「長歌不載」と記してあるから、あるいはその反歌なのかもしれない。

△付記▽

1 本稿は、昭和三六年九月九日、日本近代文学会秋季大会（北海道大学における）で口頭発表したものに、補訂を加えたものである。

2 引用の作品は、斎藤茂吉全集一―六巻、増訂左千夫歌集、新訓

万葉集よりそれぞれとった。

（昭和37年10月29日稿）
（武蔵野体育大学講師）